

目次

序文	
善光寺縁起と善光寺信仰	小林一郎 7
善光寺阿弥陀三尊像	下平正樹 17
善光寺ゆかりの人々	32
善光寺ゆかりの文化財	42
善光寺まいり（庶民信仰）	48
善光寺伽藍の変遷	51
展示目録等	

凡例

- ☆本書は、第十回特別企画展「善光寺信仰」の解説と展示資料の紹介を主としている。
- ☆紙面の都合上、展示資料の一部を割愛させていただいた。
- ☆陳列の順序は、本書と必しも一致しない。
- ☆本文中での敬称等は、省略させていただいた。
- ☆本書の図版名称中、ゴシック体は、展示資料である。
- ☆指定文化財の名称は、国指定を重要文化財と、県市名を付し表記した。
- ☆展示資料・写真等の貸与およびご教示をいただいた方々は、冊子末に記した。お許し願いたい。
- ☆本書における責任は、すべて長野市立博物館にある。

十回目の特別企画展覧会を迎えて

長野市長 柳原正之

長野市は、日本の屋根と呼ばれる本州中央内陸地方を代表する都市で、豊かな自然環境に恵まれ、人間性にあふれた生活都市です。これは、私どもの先人が、この緑あふれる山と平野・清らかな大気と水を愛し、そこに深遠な生活文化を築き上げてくれた貴重な文化財ともいえます。そして、この誇り高い郷土を、輝やかしい未来へ伝えていくための努力は、三十四万市民が総力をあげて続けていかなければならない大事業です。そのため、正しく自然を理解し、そこにくり広げられて来た人々の生活の様子を正しく知ることが大切なことです。

そこで進められて来たのが社会教育を盛んにして、市民一人ひとりの関心をより深めていくことでした。

昭和五十六年秋、長年の夢が実現し、市のほぼ中ほどに建設中の八幡原史跡公園の一角に、「長野市立博物館」を開館できました。約八年近い長い歳月をかけ、広く識者の専門的な指導を仰ぐとともに、多くの市民の意見をまとめ、地方都市には例を見ないほど内容の充実した総合博物館を開館しました。以来四年目の春を迎え、この間四十万人にならんとする多くの来館者でにぎわいました。

この博物館の特徴の一つは、自然科学・人文科学にわたる研究機関を持つことで、そこで研究された身近な成果を一般に公開して来たことです。天体学習室では、四季折々の天体の様子を毎季脚本を新たにプラネタリウムで投影、多くの市民に宇宙の姿を紹介して来ました。特別展示室では、実演を交え、市民の参加を積極的に受けながら臨場感にあふれる構成で、古代からの人々の生活の様子を展示して来ました。そして、これらの展示が、長野盆地の歴史と人の生活を主題としている常設展示の内容を、より深く専門的に補って来たところですが、今回の特別企画展覧会は、「善光寺御開帳と時を同じくして『善光寺信仰』と題しての催しで、長野と最もかわりの深い企画展となった次第です。

館創設当初の目標である新しい市民文化の創造により役立てられることを望みます。

“善光寺信仰” 開催にあたって

長野市立博物館長 掛川 一夫

長野市立博物館では、常設展示の内容をより深く理解していただくため、歴史・民俗の各部門にわたり、学芸員室の研究成果をまとめ、企画展示の場をもって来しました。開設以来四回目の春を迎え、その企画展示の回数は一つの節ともいえる十回目となりました。しかも、開設以来初めての善光寺御開帳と時が重なった縁もあり、ここに「善光寺信仰」を主題とする企画展覧会を開催いたします。

善光寺は、庶民の寺・善男善女の参詣でにぎわう寺として、日本中の人々から信仰され長野の町と共に繁栄してきました。これは、むずかしい戒律に拘束されることなく、四宗四門にこだわりなく、市生の人々の願いがかなえられるという身近かさが、千年を越す長い間の信仰となつて今に伝えられたものと思われまふ。

寺に伝わる縁起などによると、善光寺本尊は、唐天竺から百済を経て六世紀に日本に渡来、幾多の転変を越えて長野の地に安置されたと言われています。世界と日本・長野を結ぶ仏教文化が古くからこの地に根ざしたことを物語っています。

しかし、これまでの間、戦乱の波にまき込まれたり、時の権力に利用されるなど、寺にとっては幾度も災難に会つたことが伝えられています。時には草堂すらなく、礎石を残すだけというほどの荒廃だったにもかかわらず二百を越すほどの模倣仏が全国各地の寺に祀られ、そこには極楽往生を願う庶民の念仏の声がたえなかつたといわれます。寺創建当時から文化財は、長い間に各地へ移され、大切に保管されて今日まで伝えられています。これ等を一堂に集めて展示できることは、館開設以来の大事業です。

館では、これを善光寺信仰として広くとらえ、ここに展示をいたしますが、これまでの間、善光寺当局はもちろん、文化庁・東京国立博物館等の御指導と、円覚寺はじめ各地の寺院などの御理解・御協力を賜りました。ここに御縁のあつた方々にあつくお礼申し上げます。